

重厚長大の製造業に代わり、新産業育成を急ぐ川崎市ではいま、福祉をキーワードにした異業種交流が活発だ。メンバーの多くは板金加工や回路基板製造、木工品加工など福祉産業とは縁遠かった中小企業の経営者。福祉関連の企業と組んで新分野に進出、親会社に頼らない「脱下請け」を目指す。福祉の先進国、ドイツでの販売が内定した商品が生まれるなど活動も軌道に乗り始めた。

七月上旬、川崎駅近くの産業振興会館(幸区)に約二十人が集まった。集まったのは「川崎市福祉産業研究会」のメンバー。製造業の空洞化で危機感を強めた川崎市の呼びかけで市内の堅企業九社の経営者が集まり、昨年七月に旗揚げし、今では参加社も二十二社に増え、毎月一回、ビジネスの種になりそうなアイデアを持ち寄る。この日は新しい福祉機器のプランを発表、事業化へアイデアを出し合った。その一つが介護サービスの「イズ・インターナショナル(多摩区、菊地康夫社長)などが提案する「邪魔にならない住宅の手すり」。

日本の家屋は廊下や階段が比較的狭い。高齢者介護用の手すりを後付けで設置すると健常者が通りにくくなる。そこで普段は手すりを折り畳んで壁際に収納する「脱下請け」を目標とする。高年齢者が使う時だけ電動で引き出すプランが固まった。「従来にない発想を研究会を通じて得たのは収穫」と菊地社長。「近く特許を取得して住宅改装需要を取り込む」と意気込んでいる。ものづくり共和国に参加する人もいる。その一人が金属加工の佐々木工業(高津区)の佐々木政仁専務だ。「実際に手すりを製造・加工するのはモノづくりの経験豊富な我々の出番」と売り込む。

新 人脈 地脈

【川崎】

川崎市福祉産業研究会



異業種交流で脱下請けを目指す川崎市福祉産業研究会のメンバー(幸区の産業振興会館)

「福祉」で脱下請けモノ作りの経験持ち寄る



ライズ・インター社長 菊地康夫氏



佐々木工機専務 佐々木政仁氏



伊吹電子社長 松田正雄氏

声や音を増幅するヘッドホン型の「音声拡聴器」を開発した回路基板製造の伊吹電子(高津区、松田正雄社長)。医療器具の補聴器に比べて価格が三十分の一程度と安い。見えにくい目も若く両手が自由に使える。もともとは大手音響製品メーカー向けに液晶制御回路などを製造していたが、親会社の製造拠点の再編で仕事が激減。「難聴だった国内での発売に先駆け昨年秋、福祉の先進国、ドイツで試作品を展示したところ問い合わせが殺到。今年十月には完成品を持って再び渡独する。米国でも大手商社を通じて発売する計画が進んでいる。

川崎市では重厚長大産業が衰退。法人税収も落ち込み新産業への転換を迫られている。阿部孝夫市長も「高齢化が進む中で福祉産業は重要。川崎市内だけでなく国際社会を視野に入れて研究開発を進めてほしい」と期待する。

出るなど経営は極めて厳しい」という。生き残りをかけて福祉分野に進出した。「高齢者が冷たい金属を触ると驚いて転倒するかもしれない」との意見を参考にし、加工した経験が少ない木の手すりをあえて使う予定。だが、「新たな加工技術を取り込めた」と前向きだ。海外展開を目指す新製品も登場した。

通常はボタンで電源を入れたい切ったりすれば良いと

「研究会のメンバーには介護サービスの会社など福祉に詳しい会社もある。門外漢にはわからない問題点を指摘してもらえ」と松田社長は異業種交流の利点を強調する。

例えば、電源のスイッチ。通常はボタンで電源を入れたい切ったりすれば良いと

(川崎支局長 伏井正樹)